

長屋談義 つつましく生きるとは

クマさん「え～、明けましておめでとうございます。ご隠居さん、いますか～、あ～居た居た。まあ、本年もよろしくってところでございます。」

ご隠居「なんだね、正月早々大声で入ってきたらこんどは神妙になって。クマさんらしくないね～、またなにかややこしい話でもあったのかな。まあ、顔を見るとお屠蘇を飲みすぎたというような顔をしているがね。」

クマさん「いや、そんなに飲みすぎたって～わけじゃあね～んだが。ちょっと気になることがあってまた話を聞きて～なァと思って新年のあいさつを兼ねて顔を出したんで。」

ご隠居「それで聞きたいってのはどんなことかね。」

クマさん「前に話を聞いたとき、なんだ、あの～、アインシュタインがどうのこうのと言って日本人をほめたっていう話なんだが、要するに日本人は貧乏でいたほうがいいっていうことかいな。貧乏じゃあ自慢じゃあね～がタップリと味わっているぜ。それをほめているのかな～って気になってね～。」

ご隠居「ああ、たしかに幕末から今日まで日本を訪れて日本人をほめている外国人はかなり多くいる様だな。アインシュタインも別に貧乏だから日本人をほめたわけではなく、西洋の文化や技術を取り入れても、貧しくとも本来の生活の中で自然との調和、つまり盆栽を作ったり四季折々の生活の中に溶け込んでいる優雅な風習、たとえば梅を愛でる、打ち水や風鈴など夏の風物、お月見やら紅葉を楽しむなど質素と謙虚さなどの美德を評価したんだ。」

クマさん「なんだ、貧乏をほめていたんじゃあね～のかァ。それじゃあ、あつしらはお呼びではね～ってわけだ。じゃあサイナラだ。また来るよ。」

ご隠居「正月早々、そうせつかなことを言いなさんな。それらの人たちが言うのは日本人が貧しくとも、人間らしい誇りを失わずつましく生きている姿をみて西洋人は感激を持って受け止めたんだ。その意味ではクマさんも十分に褒められる資格があるんじゃないか。」

クマさん「へー、貧乏なあつしでも西洋人に褒められるってわけですかい。」

ご隠居「べつに貧乏をほめているわけではなく、貧乏にもめげずに小さな庭に

も植木鉢があり清潔な環境で、家族で仲良くつつましく生きている平均的な日本人だから褒められる資格は十分にありだよ。たとえば信長の時代に来日した宣教師のザビエルは、“この国民は、私が出逢った民族の中で、最もすぐれている。……日本人は一般的に良い素質を持ち、悪意がなく、交際して非常に感じが良い。彼らの名誉心は極めて強く、彼らにとって名誉にまさるものはない。日本人は概して貧しいが、武士も町人も貧乏を恥と考えている者はない。”と書いているんだ。」

クマさん「なるほど、貧乏を恥と考えないやいいんだな。」

ご隠居「こうした庶民感覚は古代から続いてきた美徳なんだな。たとえば万葉集には“山上憶良が『銀（しろがね）も金（くがね）も玉もなにせむに勝れる宝 子にしかめやも』と詠んでいるが、彼は遣唐使に加えられたり地方長官をやっているんだが、素朴な感情を詠んでいるものが多い。彼のようなインテリだけでなく一般庶民も生活の苦しみや恋の歌、そしてなにより自然と親しみ自然への恐れなどを詠んだ歌が多く残されており、こうした自然と調和した生き方、日本人の感性は縄文時代に生まれ万葉の時代から文字で残されてきたようだな。」

クマさん「え～なんだか難しい話になってきたなあ。もうチョットやさしくはなしてくれね～かな。」

ご隠居「クマさんは西行の話は知っているかな。」

クマさん「ああ、桜の花が好きで桜の下で死にて～、ていった奴だろう。あっしの大好きな花見の先生みたいなやつだからあっしも聞いたことがあるぞ。」

ご隠居「そうなんだ。“願わくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ”はあまりに有名だ。平安末期の時代で北面の武士と言うエリート of 武士であったが23歳の若さで出家し、草庵に住んだり放浪の旅を続けながら多くの桜の花の歌を詠んでいる。たとえば“吉野山こずえの花を見し日より心は身にもそわずなりにき”。つまり桜があまりに美しく咲いて居り自分の魂が自分を離れてしまっているというのだ。これらが日本人のところに深く刻まれてきたんだ。晩年には東大寺の再建のため平泉まで出かけていくが静岡県では有名な“年たけてまた越ゆべしと思ひきや 命なりけり小夜の中山”と詠っている。こうした歌が芭蕉を初め多くの日本人の心に焼き付いて大きな影響を与えているんだ。クマさんが花見好きなのは単に酒が飲めるからじゃあない。酒な

らいつでも飲める。しかし日本中で花見の宴をやっている姿はとうてい外国人には理解できない。庶民の中に花を愛でる生活文化が根付いているからだ。」

クマさん「なるほどなァ、あっしが花見好きなのは日本文化かァ、じゃァ、あっしも文化人だな。」

ご隠居「そうなんだ。花を愛でる人は文化人だと言っていいだろうね。だけど大切なことは、花を愛でることができるその心が大事なんだ。たとえ身の周りに何もなくても、そのなかで心豊かに生きられるならなおさらいいね。私もいつかそのような心境になりたいと思っているんだがね。」

クマさん「ご隠居さんだつてつつましく生きているんじゃないか。」

ご隠居「わたしなんか、やむを得ずつつましくやっているだけさ。口では“世のため、人のため”なんて言っているが俗人のせいかいつも一花咲かせたい、なんて思って馬鹿なことをやって来たクチさ。でも昔もそんなことを思いながら見事につつましい生活者のモデルになった人もいるんだな。私もあこがれた『方丈記』の鴨長明だ。」

クマさん「なんでィ、そのカモが長ネギ背負ったような奴は、」

ご隠居「鴨氏というのは古代から続いた名門だが、鎌倉時代の長明は下加茂神社の正禰宜になりたいと願っていたがかなえられなかったので50歳でふてくさって家にこもり、出仕もしないで山中に遁世してしまったんだ。そして方丈（約3m四方）の住まいで『方丈記』という“行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて 久しくとどまることなし。”という有名な言葉で始まる随筆を残したんだ。自分が出世できなかったことを恨んで隠遁したんだが、貧しくつつましく暮らしているうちにそれが快適になり、この世で一番大事なのは心が安らかであるかどうかだ、絶えず心が安らかでないなら宮殿に住んでいても空しいことだ、という心境になったわけだ。」

クマさん「ふ〜ん、それもえれ〜もんだ。」

ご隠居「だけど『清貧の思想』と言う本を書いた中野孝次氏は“鴨長明は世間と人間への関心を最後まで捨てきれないでいる煩惱の人だ。世の中への未練、貪欲な好奇心、執着を捨てきれず、捨てきれない自分に忠実

に生きた人だ。”と言っている。そんな長明になにか共感したくなるね。」

クマさん「ふ〜ん、ご隠居さんもなかなか複雑なんだなア。それじゃあ、ご隠居さんも山ん中へこもるかね。」

ご隠居「いや、私はもう今が方丈の住まいで隠居している身だよ。長明と同じように煩惱だらけだし、世間に未練もあるし、好奇心も強いと思うよ。」

クマさん「なんだか、えれ〜話になってきたなあ。もっと身近な話ってね〜のかなア。」

ご隠居「そうだな、クマさんは偉い人だが質素な暮らしをしていた人を聞いたことがあるんだろう。」

クマさん「うん、知っているぞ。メザシを喰っていた土光さんだ。」

ご隠居「そうだね。東芝の再建や臨時行政調査会の会長をやったり大きな業績を上げた人なんだが夜の宴会には絶対出なかったようだ。そこで財界では朝食会をやるようになったというんだが。それにしても後継の東芝では粉飾決算をやり1万人もの従業員が首になってしまった。土光さんはあの世で嘆いているんだろうね。でも土光さんの言っていた『生活は質素に、社会は豊かに』という口癖はお母さんのしつけだったんだな。」

クマさん「へー、土光さんのおふくろってえれ〜人だったんだなア。ウチのおふくろはいつも何かあると“もったいない、もったいない”ってグチるんだ。うるさくてしょうがネ〜。」

ご隠居「なにをいうんだ。クマさんのお母さんは土光さんのお母さんと同じなんだよ。それにいまは“もったいない”と言う日本語は世界中に認知されている言葉なんだよ。親の云う事を聞いて努力しなけりゃあだめだよ。昔から偉い人を育てたのは母親の力が大きいんだ。中野孝次氏の本に出てくる《本阿弥行状記》で刀剣の鑑定で有名な本阿弥家は織田、豊臣、徳川時代を通じて盛名をはせていたんだが、中でも光悦の母親妙秀は慳貪（欲深く、むごく、食欲）を憎み、自身もまったく質素な暮らしぶりで子孫に大きな影響を残したんだ。これはそれよりず〜と以前の十世紀に源信と言う僧侶が、“足ることを知らば貧と言えども富と名づくべし、財ありとも欲多ければこれを貧と名づく。”と言っているんだ。そうした思想が吉田兼好などに引き継がれ、さらに妙秀など市井の人々に伝えられていたんだな。」

クマさん「ふ〜ん、世の中のお袋ってのは大したもんだ。そんな昔から日本人は貧乏でもよいと考えてきたのかなあ。」

ご隠居「むかし“親の小言と茄子の花は千に一つの無駄がない。”と言われたなあ。」

クマさん「親の小言と冷酒はズ〜と後から効いてくる、ってやつかな。」

ご隠居「そんなチャチャを入れている場合じゃあないぞ。さっき言ったように貧乏だからいいと言っているわけではない。“足るを知る”という考え方が大切なんだ。江戸時代でも私が好きな橘曙覧（あけみ）という人は、“楽しみはまれに魚煮て子等皆がうまいうましといひて食う時”とか“楽しみは珍しき書人に借り はじめ一ひら広げたる時”など楽しい歌をたくさん作っている。この人は幕末、名君と言われた福井藩の松平春嶽に出仕を所望されたが、子だくさんの汚い家を恥じて断ったため春嶽は、自分は富貴だがこころの豊かさでは到底かなわないと後世子孫あてに反省文を書き残しているんだ。」

クマさん「へ〜、あっしだってたまにゃ〜魚をはずんで喰うがそんな歌は出てこね〜なあ。ガキどもとうめ〜魚を取り合うがね。」

ご隠居「日本には私も紹介しきれないほど清貧の人がいる。クマさんも同じ幕末で有名なところでは二宮尊徳を知っているだろう。」

クマさん「ああ、本を読みながら仕事をやっていたんだろう。いまだって歩きながらスマホを見ている人間はいっぱいいるぞ。あぶなくて見ちゃあいられね〜なア」

ご隠居「そんなのはあまりほめられた話ではない。尊徳は儉約を奨励して貯蓄をし、橋をかけたり新田開拓などを進めていったんだ。自分の生活はまったく質素で、有名な言葉は“道徳無き経済は悪、経済無き道徳は絵空事”と言っているんだ。そして殖産興業を推進しいまの信用組合、信用金庫の創始者でもあったんだ。」

クマさん「なるほど、尊徳さんの言ったことが土光さんのおふくろさんにも伝わったのかな。」

ご隠居「そういうこともあるだろうね。尊徳思想は松下幸之助や豊田佐吉も影響を受けているんだ。幸之助時代の松下電器（現ナショナル）は、従業員をとことん大切にすする一円融合の家族的経営で知られており、日

本型経営の一つのパターンをつくったとされる。トヨタも日本的経営をやって世界のトヨタとなっている。こうした人たちが日本の産業を引っ張って行ったんだ。だから戦後は、日本人に民主主義をどう教えるかと苦心したGHQ占領軍も尊徳を“農民から出て民主主義の闘士となったリンカーンにも比すべき人”として手本とするように勧めたというんだな。私も全国の小学校に尊徳像を建てればいいなあと思っているんだ。」

クマさん「えー、だけど戦前の封建主義の宣伝に利用されたんじゃないのか。」
ご隠居「たしかに軍部が“ぜいたくは敵だ。”とか“ほしがりません。勝つまでは”とか倹約と増税を宣伝するために利用したが、戦争が激しくなると銅像はみんな武器製造のために供出させられてしまったんだ。権力者は“倹約と勤労”を利用するが、尊徳は『分度』ということを強調しているんだ。これは家計と同じで“入るを計って出るを制する。”ということだ。昭和の軍部は国家財政の半分を軍事予算とし、これを抑制しようとした高橋是清大蔵大臣を暗殺して独走して行った歴史がある。今の政府は税収の倍の予算で借金を増やしている。さらに尊徳は『推譲』といって働いて蓄えたら他のために譲ることが大切だと言っている。」

クマさん「へー、えらいもんだなあ。尊徳さんをいま見直さなくちゃ、」
ご隠居「最近、とくに東日本大震災以降、日本人の忍耐強さ、団結力などが世界的に見直されているんだが、この背景に尊徳思想などが実践的に見直されているんだ。尊徳はさらに一元融合という言葉を使っている。それは、“この世で相対するものは、すべてが互いに働き合っただけで一体となっている。だから別々に切り離して考えるのではなく、一つの円の中に入れて見る。その一つの円の中で、すべてのものが互いに働き合い、一体となったときに初めて結果が出る。”というんだ。」

クマさん「それじゃあ、尊徳さんや土光さんを見習ってりゃ東芝の粉飾決算や旭化成建設の杭打ちごまかしはないだろう。日本中の経営者に尊徳さんの勉強をさせなくっちゃあならね〜なあ。」
ご隠居「クマさんもうまいこというね〜。まったくそうなんだよ。一時的にごまかしてもそれが明らかになれば社会的にも経営的にも致命傷を負うんだからな。ドイツのフォルクスワーゲンも同じだ。」

クマさん「中国の連中にも教えてやりたいもんだ。ニセ餃子、ニセ米なんて偽物だらけだ。パクリもやりたい放題だし、公害も垂れ流しだ。」

ご隠居「その中国でも報徳思想が人気なんだ。もっとも北京大学など一部なんだがね。彼らは経営と道德の調和が気に入って居る様なんだ。そちらには大本の孔子様がいるんじゃないかと言うと、孔子は道德だけだから駄目だというそう。とにかく中国でも尊徳思想が広がるといいんだがね。だけどさっき言った『推譲』なんて受け入れないだろうね。自分のことしか考えないプラグマティズムで、特に共産党特権階層が超巨額の資産をため込み、あわよくば海外へ逃亡しようという人たちが理解できるわけがない。日本の場合は古代から封建時代も共同体が存在し、共存の思想が生まれている。よく日本は武士道があると言われるが江戸時代でも武士階級はせいぜい1割だ。商人も『売ってよし、買ってよし、世間よし』の三方良しの精神があった。こうした社会性がアインシュタインなど日本を訪れた人たちが絶賛したわけだ。つまり清貧の思想が日本人の底流にあるんだ。」

クマさん「ふ～ん、日本人はすごいもんだな。」

ご隠居「いや、清貧の考え方は日本だけではないぞ。私なんかは高校時代にワーズワースの“暮らしは低くとも想いは高く”なんて言葉に感じ入ったわけさ。ところがこの言葉を校歌に入れている学校があるんだな。奈良の十津川高校だ。現代の人でもアメリカの俳優で『地球の静止する日』などに主演していたキアヌ・リーブスなんかはまさに清貧の人だ。つまり収入は1億ドル（120億円位）稼いでも福祉活動なんかに投じてしまい、自身の生活は極めて質素なんだそうだ。」

クマさん「いろんな人がいるんだなあ。でもみんな遠くの方か雲の上の人みたいな感じだなあ。」

ご隠居「いや、クマさん。この静岡にも立派な清貧の人は大勢いるよ。私の知っているU氏は昨年亡くなってしまったが、まさにすごい人だったなあ。工業高校を出て鉄工所を始めて一代で精密加工企業を株式上場の企業に育て上げたんだ。私が本社を訪れたときに“立派な社屋ですね～”と言った際も、“いやこれは建て貸しです。持たない主義でね。”という。ベトナムへ工場を作り打ち合わせは日帰りで行っていた。深夜便での往復だったんだらうね。東京へ行くにも家を早く出れば新幹線は使わなくて済むと言っていた。株の多くは社員に持たせていたため公開後もあまり個人の資産とはならなかったようだ。しかし社長は

50代半ばで退任して従業員の中から社長を指名して自分は会長になったが農地を借りて農業を始めたんだ。私たち異業種交流会の仲間を招いて春にはタケノコ祭り、秋には芋煮会をやったり楽しい思い出が沢山ある。ヨガの影響か昼食は抜きで、我々との飲み会にも酒は飲まなくても付き合いは良くしてくれた。私も理事をやっている福祉事業のNPOでは大変力強い支援者でもあった。生活も質素で省エネを信条とするまさにロハスを絵に描いたような人だったんだ。」

クマさん「え〜、そんな人が静岡に居たんだ。惜しい人だなあ。ご隠居さんも寂しいだろうなあ。」

ご隠居「そうなんだ。亡くなったのも私も含めて多くの人も知らずにいたし、思い出は尽きないよ。」

クマさん「ほかにも身近にいるんだかね。」

ご隠居「安倍川中流の掘立て小屋で日本語学校を始めた私の友人S君もすごいよ。いまは駅南に立派な校舎があり、れっきとした学校法人で東南アジアを中心に250人位の日本語研修生を受け入れている。一緒にベトナムを訪れた時、休校になっていたホーチミンの日本語学校の再建まで実現させたんだ。しかし自身は理事長であるが私財は学校へ投じていたし、薄給で頑張っている。私なんかとてもかなわない。」

クマさん「へー、そうした人がそんな近くにも居るんだなあ。」

ご隠居「だから紹介しきれないくらいいると言っただろう。日本ではそうした自分の生活より社会のために献身している事例はさまざまな会社や事業所や地域にもいっぱいいるんだ。こうした伝統が創られてきたのはやはり日本の文化的影響が大きいものだと思うね。」

クマさん「ご隠居さんはつつましく生きることが大事だと言っているが、なんとも貧乏暮らしでも立派に社会へ尽くしている人も多いんだなあ。あつしにゃあ難しいけど。」

ご隠居「いや、クマさんだって仕事を通じて立派に社会に貢献しているんだ。もっと自信を持たなくちゃあだめだ。いいかね、今の日本だって戦争が終わった跡は焼け野原だったが世界中が驚くほどに復興して工業ではアメリカをしのぐほどにまでなったのは勤勉な日本人の成果だ。そうした日本人を育てたのは一つには厳しい自然環境があり毎年のように台風による氾濫や干ばつ、冷害による飢饉、地震や津波などの被害

もあつたがそれにめげずひたすらに勤勉に励んできた。質素、勤勉、工夫、そうした土台が日本人のなかに築かれてきたんだな。クマさんもそうした日本人の典型だからもっと胸を張って励まなくてはな。」

クマさん「え～、あつしが日本人の典型ですって。てへへ、ご隠居さん、そう正月早々からかっちゃいけませんぜ。あつしが典型ならさっきのえれ～人は何ですかい。」

ご隠居「庶民の典型がクマさんなら、尊徳さんらはその先駆者であり、指導者なんだ。庶民が正しい方向へ行くためにはそうした身近な指導者が必要だろう。そして指導者も独りですべてのことをやったわけではない。どんな優れた業績の残した人も必ずそれに共鳴して、支持して、協力した大勢の人がいたんだ。」

クマさん「なるほど、そうしたあつしらを引っ張ってくれる人がいると助かるなあ。ご隠居さんもその一人かア。」

ご隠居「いや、私はクマさんの話相手に過ぎないよ。むしろクマさんの悩みや疑問を聞いて少しでも役に立つ話を受け売りするだけだよ。だけど二宮尊徳、土光さんだけでなく優れた尊敬する人の話を少しでも紹介して日本人の伝統として引き継いでもらえるようにするのも私なんかの隠居の役割かもしれないなあ。」

クマさん「ばかに神妙だなあ。ところでつつましく生きるのは何となくわかったような気がするが、みんながつつましく欲をもたね～で生きていったら日本の経済は落ち目になってしまうんじゃあね～のかなア。」

ご隠居「ああ、いいことを言うね～。さっき『清貧の思想』のことを話したが、あの本が出たころはバブル経済のころで、共感する人も多かったがクマさんが言ったように批判する人も多かった。当時の経済学者や評論家は中野氏の主張を<貧乏礼賛>と受け止めて批判したが、貧乏礼賛と清貧とは違う。結局は日本人はいまの中国人みたいにブランド商品を買えばいい、アメリカの不動産を買ったりで世界の人から顰蹙を買っていたんだ。その思い上がりがその後のバブル経済の破たんまで日本人は自信を失う羽目になってしまったんだ。失われた20年なんて言う人もいるくらいだ。」

クマさん「そういや～そうだけど、それで貧乏でもいいからつつましく生きる、なんてご隠居さんが言うような風潮が出てきたのかな？」

ご隠居「たしかにこの間に、一時韓国が輸出で大きくなり日本企業が押されてしまった面もあり、韓国に見習えなんて書いていた新聞もあった。しかしいま韓国の経済は財閥中心主義で行き詰ってしまい破たん寸前だ。中国も世界の下請け工場で名目 GDP で日本を超え世界2位となったんだが、輸出産業の中心であった製造業が賃金アップと輸出不振となり、それをカバーするため不動産や公共投資で GDP を伸ばしたが不動産バブルが破綻しつつあるようだ。だから中国も一時言われたアメリカを追い越すどころか莫大な負債を抱えてにっちもさっちもいかないところへはまってしまっている。」

クマさん「そりゃ〜、いつもご隠居さんが言っているからわかるけど。どうということなんで。」

ご隠居「私が言いたいことはアメリカの資本主義も中国の社会主義も行き詰ってしまったということだ。つまりこれからは世界経済の高度成長はあり得ないところへ来てしまっているということなんだ。だからバブルを煽るような考え方はもう破産しており、清貧の思想、つまり土光さんのお母さんが言ったように、“暮らしは質素に、社会は豊かに”を追及しなくてはならない時代になってきたということだ。天文学者で宇宙物理学者の池内了氏は、人類が減ぶとしたら何が原因か、との質問に“私が最も心配するのは、欲張りで、先行きを考えずに自分の利益だけを考える。そんなバカな人類のために絶滅する危険性があることだ。”と書いている。」

クマさん「えー、またまた難しくなってきたぞ。もうすこしわかりやすくやってくんね〜かなア。」

ご隠居「かいつまんでいえば、アメリカは冷戦終了後、ドル世界支配体制を築いたんだが、大量のドル紙幣を世界中にばら撒いて生活をするようになってしまった。そのドルを回収するため石油利権を独占し、武器の輸出を行い、時には戦争を仕掛け、金融工学システムを駆使してマネーゲームを行うなどが中心となり、製造業は人件費の安い中国で作らせてきたんだ。その結果、国内の雇用は減り消費も落ち込んで中間層が貧困化し、財政赤字は日本の十倍だ。それを国債でカバーし日本や中国へ押し付けてきたんだ。米中とも強欲のために戦争も辞せず、という国だ。」

クマさん「う〜ん、言われてみりゃあ、そんな感じかなア。だけど最近アメリ

カは景気が上向いているってテレビで言っていたぞ。」

ご隠居「それはリーマンショックと言うマネーゲームの最たるものがパンクしてからようやく金融などの大手企業落ち着いてきたと言うところだ。雇用が増加したと言うが、IT化の進行で正規労働が減少し臨時雇用が増えただけだ。そして中間層が減り、貧困層が拡大しているんだ。給付が切られる民間医療保険、莫大な生涯負債となる奨学金、大学生の就職難など中間層の貧困化は拡大している。そして莫大な雇用保険基金を株に投じて株価を釣り上げているんだ。」

クマさん「へー、アメリカって国はもう少しまともかと思っていたんだがなア。」

ご隠居「私だってそう思うよ。だけど最近では著名なアメリカ事情に詳しい人たちの報告ではだいぶ厳しい見方をしているんだ。だいたい資本主義と言うのは資本家がカネを貸して営業利益から回収するシステムだがゼロ金利と言うのはもはや普通の事業では利益は生まれない。それを称して資本主義は破綻したという学者もいる。そのためドル紙幣を大量印刷して買占めかマネーゲームで回収するという事態になってしまった。そのドル支配体制から脱却する動きがEUにもあるし、中国もAIIBでドル体制を掘り崩そうとしている。日本もマネーゲームをして円を“異次元”に乱発して株価を上げさせるというマネーゲームをまねている。しかし実体経済の発展のない所で、実体経済の4倍も紙幣を刷りデリバティブ取引で10倍のマネーゲームだけ発展してもいずれ破たんする。いま私が一番怖いのは年金基金の半分以上を株に投じてマネーゲームをやっていることだ。」

クマさん「そりゃ〜大問題だ。う〜ん、なるほど、で・・・中国はどうなんで。」

ご隠居「中国は国家資本主義とも言われるが私は国家社会主義だと思う。改革開放路線となり、先に儲けられるものはどんどん稼げ、ということであらゆる特権を持つ共産党幹部が国の資金（海外からの投資も大きい）を利用して独占的利益を手中にして巨額の資産を形成したのでそうしたシステムを変えようにも変えられないという自己矛盾に陥ってしまっている。もはや共産党支配システムが崩壊するか、北朝鮮のような軍部独裁となるか二つに一つだと思うね。」

クマさん「もしアメリカや中国の経済が破たんしたら日本はどうなるんで。」

ご隠居「日本が保有する米国債は中国よりも多い。アメリカが破綻したら日本もパンクするだろうね。ニクソンショックの時もドルを不換紙幣にし

て事実上の借金をチャラにしたくらいだからなア。」

クマさん「そりゃあ大変だ。のんびり話をして居るどころじゃあね～なア。ご
隠居さん、どうしたらいいんだね～」

ご隠居「そうになったら私だってどうするもない。あきらめるしかないな。だからいまからでも清貧につつましく生きることだけは守っていかなくてはならないんだ。どん底の中でも人間は生きて居られるんだ。マネーゲーム経済が破綻すれば一時は混乱するだろう。しかし、マネーゲームがなくなれば貧富の格差は少なくなるだろうし、世界中には助け合えば十分な食料も燃料もある。それを中国のように元の増刷で半分以上を買い占めて浪費するようなことをなくせばみんな潤うんだ。」

クマさん「そんなにうまく行くんかね。」

ご隠居「さっき、二宮尊徳の話をしただろう。江戸末期の飢饉の折にも尊徳の指導で飢えや子女を売り飛ばすような目に合わなかった藩もあった。破綻状態にあった会津藩も藩主上杉鷹山の藩政改革で餓死者はゼロだった。そうした必要な対策をしていけばみんなが助け合って生きられるんだ。清貧の思想とはそうしたわが身の欲望を考えるのではなく、社会がいかに豊かになれるか、助け合えば分かち合えば足りるんだ。そうした考えがつつましく生きながら、社会に貢献することが大切だと言いたいんだ。」

クマさん「う～ん、なるほどそう来たわけかア。なんだか、あつしが貧乏でもちっとも苦にならなくなったみて～だな。だけどアメリカや中国の貧乏人はそうは考えね～だろうな。」

ご隠居「そうだね、アメリカだっていま不満を感じている人は多い。しかし政治は無制限の政治資金の時代になり天文学的資金を提供して政治を操作する金融やら産軍複合体制の力が強いから今は抑圧されている。中国も同じだ。莫大な国防費とそれよりも過大な治安維持費によって抑えられている。両国とも日本とは比べ物にならないくらいに貧富の格差は大きい。しかし、人間は抑圧だけでは支配されない。必ずそうした体制は必ず内部矛盾で自己崩壊している歴史がある。」

クマさん「またまた歴史かア。」

ご隠居「温故知新という言葉があるが、古きを温め新しきを知るという大切なことだよ。今回話したことで日本人が多く苦難を乗り越えて発展してきたのも新しいことを取り入れても必ず古い伝統の上に融合して

いるんだ。弥生時代にコメが普及したがこれだって縄文時代の焼き畑農業の技術や陸稲が早稲の寒冷化に向く品種の水稻を生み出して普及した。万葉時代に漢字が流入したが万葉仮名を発明し、日本語の表現が普及した。江戸時代には鎖国により自給自足の中で勤勉革命と言われる高効率の農業が行われ、明治になって西洋の文化技術が取り入れられたが和魂洋才ということで近代化が進められた。こうしたことを考えても伝統の上に新しい技術や文化が取り込まれているんだ。混迷の時代を迎えたいま伝統を大切にしたい人の生き方をもう一度見直す時が来ている様だ。」

クマさん「なるほど、歴史的に考えれば日本の伝統の中にこれからの日本の行き先がわかるのかな。」

ご隠居「そうなんだ。これからの世界はしばらくはマネーゲーム経済の破たんによって混乱すると言っただろう。そうした中で企業も地域社会も一円融合の助け合い、儉約と貯蓄、そして有効な投資を行う。そうした生活が根付けばこわいものはない。日本人の質素、勤勉、工夫が世界のモデルになるんだ。」

クマさん「そりゃあ、そうだが。そんなにうまく行けるんかなア。」

ご隠居「だから言っただろう。日本人は、そして多くの国でそれぞれの国で自然と調和して生きてきたんだ。貧困とか格差とかは外から持ち込まれたものだ。もちろんそうはいっても伝統の力を継続発展させるのは温故知新だ。一番大切なことは人として生きていくうえで基本となる理念が重要だ。そうした意味でもう一度古典にふれるがね。たとえば吉田兼好を知っているね。『徒然草』という随想を残し日本人に大きな影響を与えた人だ。」

クマさん「うん、学校で習ったと思うよ。だけどなんで『徒然草』なんだ。」

ご隠居「それは、彼が“されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々を楽しまざらんや。”と書いている。つまり自分が生きて存在しているという、これに勝る喜びがあろうか。死を憎むなら、その喜びをこそ日々確認し、生を楽しむべきである、この人間の最高の楽しみをたのしまず、この宝を忘れて、財産だの名声などと言うはかない宝ばかりを求め続けるから心が満ち足りるといことがないのだ、と中野氏は解説している。」

クマさん「なんじゃあ、それは……」

ご隠居「兼好は実に様々な人間の生きざまを辛辣に書いているんだが、このフレーズは江戸時代の俗を離れる心境を求めた文人にも激励を与えたとされている。俗を離れて生きるには貧しく生きることでもあるが従来の死生観を覆すような主張を書き連ねているんだ。」

クマさん「ふ～ん、あっしだって貧乏に負けずに人生を楽しんでいるさ。」

ご隠居「うん、その気持ちが大事だね。一日一日を大切にかみしめながら生きる喜びを深く考えることで有意義な人生になるんだ。」

クマさん「なんだか、貧乏だがほめられているような気がしてきたぞ。」

ご隠居「日本人は本当にすべてを捨てて生きた人を崇めてきたんだな。たとえば良寛は厳しい修行の後、放浪生活もしたが郷里の新潟の山中の草庵で乞食同然の暮らしだったんだが、“生涯 身を立つるにもものうく 臆々 天真に任す”といった詩を書いているがそんな境遇で生きることとはなかなかマネはできないが多くの日本人に影響を与えたんだ。」

クマさん「そりゃあ、そうだが。いくら貧乏暮らして言ったって乞食暮らしまではしたくね～な。」

ご隠居「ところがあまりに無所有、子供らとまり付きなどで遊ぶ和歌もたくさん作っているがその一つを紹介すれば、“この宮の森の木の下に子供らとあそぶ春日は暮れずともよし”など天真爛漫な生き方で清冽なその姿が人の心を打ち、後世の人にも大きな影響を与えているのはその優游という言葉を残した人格にあるんだ。」

クマさん「ふ～ん、あっしにやあとってもマネできね～なア。」

ご隠居「べつにマネしてくれって言っているわけじゃあない。こうした生き方に感銘し影響を受けた人たちがそれを書き残したり口伝えに広げたりして人間としての生き方を感じてきたんだ。一番大事なことは心だ。こころのありようが人間の生き方を決めているんだ。だからどんな境遇にあっても心がしっかりしていればモノやカネは関係ない。そうした境地になることが大切だということさ。」

クマさん「こころ、ネ～。あっしなんか、すぐにコロコロ変わってしまうが～」

ご隠居「清貧と言うのは結局は清らかで心が自由かどうかだ、と中野氏は書いているがもちろんそう簡単ではない。その自由なこころを求めて西行

などに影響されて漂泊の旅を続けた松尾芭蕉を知っているだろう。」
クマさん「ああ、古池やカエル飛び込む水の音 “ってやつだろう。”
ご隠居「まあ、そういうことだ。その芭蕉も自分は、無能無芸にしていたこの一筋につながる者、とっているんだがその真意は、この国の文芸の士の志したところを目指そうとしてきたから旅で死んでも構わないと言っているわけだ。そうした一期一会の出会いはい人であり、自然でありそれをそのまま俳句として詠んでいるんだ。“しずかさや 岩にしみ入る蟬の声” など私が好きな句だが、“よく見れば はずな花咲く 垣根かな” とか “五月雨を 集めて早し 最上川” など真に自由な心、とらわれない心だからこそ出てくる句なんだろうな。」

クマさん「それじゃあ、あっしも一句、“よく見れば しわの花咲く 女房かな”
ってのはどうかなア。素直に見て居るだろ。」
ご隠居「そんなのは川柳にもならないな。奥さんに言ったら叱られるよ。」

クマさん「もちろんでイ。口が裂けたってウチじゃあ言えね〜よ。ところでえれ〜難しい貧乏話になっちゃったが、いまの若い衆に言っただって全然通じね〜だろな。」
ご隠居「ところがそうでもないよ。今の若い人たちの間には断捨離と言う言葉がはやっている様だ。先日本屋で見かけたんだが、『ぼくたちに、もうモノは必要ない。 - 断捨離からミニマリストへ - 』と言う本なんだ。内容は、“持ちモノを最小限にしたからこそ、見えてくる本当の豊かさやモノが少ない幸せ。他人の目線ばかり気にした世界から、自分の声に耳を澄ませてみる。終わりのないモノへの追求から一度思いつきり距離をとってみること。これはもう一度「幸せ」について考え始めることに他ならない。生き方にはもっと自由な選択肢があっいいはずだから。——持ちモノを自分に必要な最小限にする「ミニマリスト」という生き方と常識にとらわれない豊かな暮らし”を紹介しているんだ。こんな本が出されるという時代を感じたなあ。」

クマさん「ふ〜ん、貧乏だとか、モノがあるかどうかなんて関係ね〜ということかア。そんな若え〜衆が出てきたんだね〜」
ご隠居「そうなんだ。それから “田舎のパン屋が見つけた『腐る経済』” という本を書いた渡辺格という若い人はわざわざ広島の高島村でパン屋を始め利益を上げない経営でパン屋を営んでいるんだ。つまり腐らない経済とは資本主義（他を搾取して、利潤を増やす＝腐らない紙幣を増や

す)を否定して、自家製の酵母を育成し、地元の有機栽培小麦でのパンを熟成するために週休3日制としているんだ。」

クマさん「ふ～ん、いまの若え～衆がネ～、信じられね～や。」

ご隠居「いや、今の若い人たちは直観的に今のマネーゲームのような経営社会の行詰まりを感じているんじゃないのかな。一部のエリート社員や技術者は別としていまの会社の経営方針に疑問や悩みを感じている若い人たちも多いようだ。そうした人たちの間ではロハス（持続的な健康、環境の維持）を目指す生活やスローライフという生活スタイルに共感する人も多い。先日もテレビの報道で全く農業経験のない若い夫婦が静岡の山間地で茶農業を始めるために移住してきたというニュースがあった。こうした人たちがまだ少数派かもしれないが、初めに言ったようにマネーゲーム経済がパンクした場合はこうした人たちが主流になるかもしれないと思うんだ。」

クマさん「なるほど、あっしが貧乏暮らしなんてグチを言っているより先に行っているんだなあ。」

ご隠居「そうなんだよ、クマさんも貧乏なんて考えないで仕事で地域に貢献しているんだという自信を持って胸を張って頑張りなさいよ。そうすりゃあ生きる喜びも増してくるし、応援してくれる人も増えると思うよ。だけど足るを知る、ということをおぼえてはいけないよ。『清貧の思想』もその一つだ。日本人は行き詰っている社会や生き方のモデルを生み出しているんだ。質素、勤勉、工夫を世界に広めることができれば世界の平和や環境問題も解決できる。そうした気概で日本人は胸を張って生きなければならないんだ。」

クマさん「ああ、なんだか元気が出てきそうだな。ありがとうさんで、今年もよろしく願いまっせ。じゃあごめんなすって。」

ご隠居「こちらこそ、ご一家のご健勝を祈ってるよ。」 (2016年1月)

* 参考

「清貧の思想」(中野孝治) 草思社

「田舎のパン屋が見つけた『腐る経済』(渡辺格) 講談社

「資本主義の終焉と歴史の危機」(水野和夫) 集英社新書

<初笑い>

“木の実は英語でナッツと言うんだよ。”

“じゃあ 木の実ナナはなんだ。”

“ああ、ナとナが二つだ。ナがツーでナッツだろう。”

“じゃあ、どんな種類のナッツだね。”

“木の実ナナは歌を歌うだろう。だからカシューナッツだ。”

<クイズ>

タクシー運転手が一方通行の道を逆方向で走っていました それを見ていた警察官は何も言いません。それは何故？

<あとがき>

- ・新年を迎えても新たな感慨は少ない。年年歳歳の延長に過ぎないのか。しかしまだまだ見るべきほどのことは多くある。新たな発見の喜びを生きる糧とするためにも今年にはどんな発見があるのか。希望を持ちたい。
- ・今回はかなり苦労しました。はじめはさらっと書くつもりが、素養があるはずのない和歌なんぞを披露するうちにワケのわからん話になってしまいました。これは知識、教養の不足のなせる業なのです。「痴識」と「狂養」ならあるが……。
- ・今日の会合で新しい言葉を知りました。ボケ防止には「キョウイク」と「キョウヨウ」が大切だという。いわく「今日行くところがある」、そして「今日用事があること」だそうです。

七無齋 佐 塚 充

・こたえ 運転手が走っても問題ない。